

様式 2

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：人間と社会

部会長名：浅野慎一

作成者名：浅野慎一

概要（2000 字）

「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリン(社会学、文化人類学、地理学、社会思想史)、および②現代的諸課題(現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会)の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供している。

授業内容は、概ねシラバスに沿って展開された。個々の教員は、資料配布、映像・音声資料等の活用、コミュニケーションカード等の活用、双方向的な意見紹介やコメント、高校の学習内容との連続性の確認、受講者の既存の知識や観点を相対化する問題提起等、多様な工夫・努力を行っている。学生からも、個々の教員の熱意は高く評価されている。

ただし、授業以外の学生の自己学習は 30 分未満と極めて不十分である。また授業内容の理解も、教員の熱意に比べれば、十分に高いとはいえない。

教員の熱意を結実させ、学生の学習効果をさらに向上させる上で、次の 4 つの問題・障害がある。

第 1 は、クラスの規模である。他の全学共通科目と同様、1 クラス 200 名を一応のめどとしているが、実際にはその上限に近い、または上限をも上回る大人数クラス(最高 220 名)が存在する。「人間と社会」の受講者は近年着実に増加し、これに伴ってクラスの大規模化も進んでいる。教員の多くは、学生の理解を深めるための双方向的授業、授業時間以外の学修確保等を目指し、様々な努力をしているが、客観的なクラスサイズの大きさによって、そうした努力にも限界があり、教育効果を一層向上させることが困難となっている。

なお「人間と社会」の各授業科目の受講者数には、一定のバラつきがある。これも、個々の教員の工夫・努力・成績評価等の差ではなく、構造的な問題である。つまり各科目の対象学生の学部、および専門基礎科目と教養原論の時間割配置によって、受講者数が大枠で規定されている。

第 2 の問題は、1 年前期の「学部指定開講枠」である。これも全学共通科目・教養原論全体に関わる問題であるが、「人間と社会」のようにカバーすべき領域が広く、多岐にわたる科目では、受講学生の関心が学習意欲の水準に直結しやすい。現に、学生の授業評価は後期よりも前期の方が厳しい傾向にあるが、その主な理由は、①前期の方がクラスサイズが大きい上、②前期は学部指定開講枠があることに基づくと思われる。

第 3 の問題は、「専門基礎科目」の位置づけの不明確さである。現在、「人間と社会」に関しては、経済学部・経営学部の二学部だけが専門基礎科目と位置づけている。他学部はすべて、専門基礎科目は自学部内で実施している。しかも経済・経営学部の教員は、「人間と社会」の科目を担当していない。そこで、「人間と社会」に関わる専門基礎科目の実際の担当者は、すべて経済・経営学部以外の教員であり、自らの授業内容がどのような意味で経済学・経営学の「専門基礎」足り得るのか、十分に理解しえず、悩みながら授業を行っている。自学部の専門基礎教育を実施しながら、他学部(経済・経営)の学生のための専門基礎科目まで一方的に担っていることに伴う負担感はいうまでもない。理系とは異なり、文系の場合、各学部の専門教育と専門基礎教育は、一層個別具体的かつ密接な関連性が求められる。何らかの改善が必要と思われる。

第 4 は、補足的な問題ではあるが、TA の少なさである。本年度、「人間と社会」部会

に配分された TA は 32 時間で、申請時間の約 3 分の 1 であった。1 科目当たり、授業 3 回分である。そのわずかな TA を採用するために、膨大な事務書類を提出し、綿密な事前業務確認が求められ、TA から「成果と改善点」を提出させなければならない。そのため、あらかじめ申請を控えたり、実際の採用を辞退するケースもみられた。実施された TA の意義や成果を確認し、検証するだけでなく、「十分な TA を採用できないこと」こそが最大の問題であるという事実を直視すべきであろう。

以上、4 つの問題を指摘した。これらは、本年度、当部会が実施した外部評価でも確認されたものである。そしてこの 4 つの問題はいずれも、「人間と社会」部会に固有の問題ではなく、神戸大学の全学共通科目・共通教育全体に共通する問題である。外部評価でも、当部会独自の問題は、ほとんど指摘されなかった。指摘されたのは、神戸大学全学共通科目・共通教育が抱える構造的な問題であった。

この事実をふまえると、本自己点検・評価報告も含め、個々の教員・各部会毎の点検・評価がどの程度、有意義なものであるか、一定の疑問を感じざるを得ない。我々は、部会単位での点検・評価に膨大な時間と労力を費やしているが、そこで指摘され、明らかになるのは部会内部では解決しようのない問題がほとんどである。必要なことは、個々の教員・部会の形式的な点検・評価やエビデンス提出ではなく、より全体的・構造的な問題の実質的な解決ではなからうか。

昨今、全学共通教育の改革が議論されている。少なくとも上記の 4 つの問題は、この改革の中で是非解決していただきたい。もし解決できないなら、このような自己点検・評価の存在意義がますます疑わしくなりかねない。

様式 2 (続き)

項目・観点ごとの記述

基準 5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

（観点に係る状況）配慮している。全体として、「人間と社会」の学習目標を、抽象的な思想・理論から、具体的・経験的事例論まで、多様な学的手法・視点から追究している。近代科学のディシプリン（社会学、文化人類学、地理学、社会思想史）および現代的課題（現代社会論、越境する文化、生活環境と技術、学校教育と社会）の双方を視野に、「人間と社会」が担当すべき広範な領域をカバーしている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー、外部評価報告書

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

(観点に係る状況) 採用されている。授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業レジュメと資料は、十分に用意されている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、映像等教材、コミュニケーションペーパー、外部評価報告書

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況) 多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能な限り配慮されている。

根拠資料

シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー、外部評価報告書

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

(観点に係る状況) 作成され、活用されている。シラバスは、思想的、理論的科目の場合、講義の性質上おのずと限界があるが、講義内容について概ねこまかく予告、解説しており、実際の講義も学生の理解力が毎年必ずしも同じでなく、また、質問にさく時間配分などの問題もあるので、完全にということはありませんが、ほぼシラバス通りに展開されている。

根拠資料

シラバス、外部評価報告書

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

(観点に係る状況) 多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能な範囲で行われている。

根拠資料

コミュニケーションペーパー、シラバス、外部評価報告書

5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

(観点に係る状況) シラバスに明示した成績評価基準に従い、適切に実施されている。

根拠資料
シラバス、外部評価報告書

5-3-③: 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。
(観点に係る状況) 講じられている。前述したように成績評価基準はシラバスに明示され、成績評価は試験答案等にもとづき客観的かつ厳格になされている。

根拠資料
試験答案

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②: 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。
(観点に係る状況) 多人数クラスのため限界はあるが、所与の環境の中では上がっている。

根拠資料
試験答案、コミュニケーションペーパー、学生アンケート、外部評価報告書

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④: 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。
(観点に係る状況) 十分に整備されていない。自主的学習を促進するには、少人数・双方向的授業の展開が必要だが、実際には多人数クラスが多く、その環境は整備されていない。もちろん所与の環境の中で、教員は自主的学習の促進に向け、努力している。

根拠資料
シラバス、教科書、配布資料、コミュニケーションペーパー

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目，専門，専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。
(観点に係る状況) 実施されている。

根拠資料
シラバス、第1回目の授業の配布資料

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，
支援が適切に行われているか。
また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切
に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。
(観点に係る状況) 多人数クラスのため、行き届かない部分も多いが、可能な範囲で行わ
れている。

根拠資料
シラバス、コミュニケーションペーパー、外部評価報告書、学生アンケート